

患者さんと丸子中央病院をつなぐココロとカラダのイキイキマガジン

ご自由にお持ち帰りください。

Marukko

まるっこ

Maruko Central Hospital Public Relations Magazine

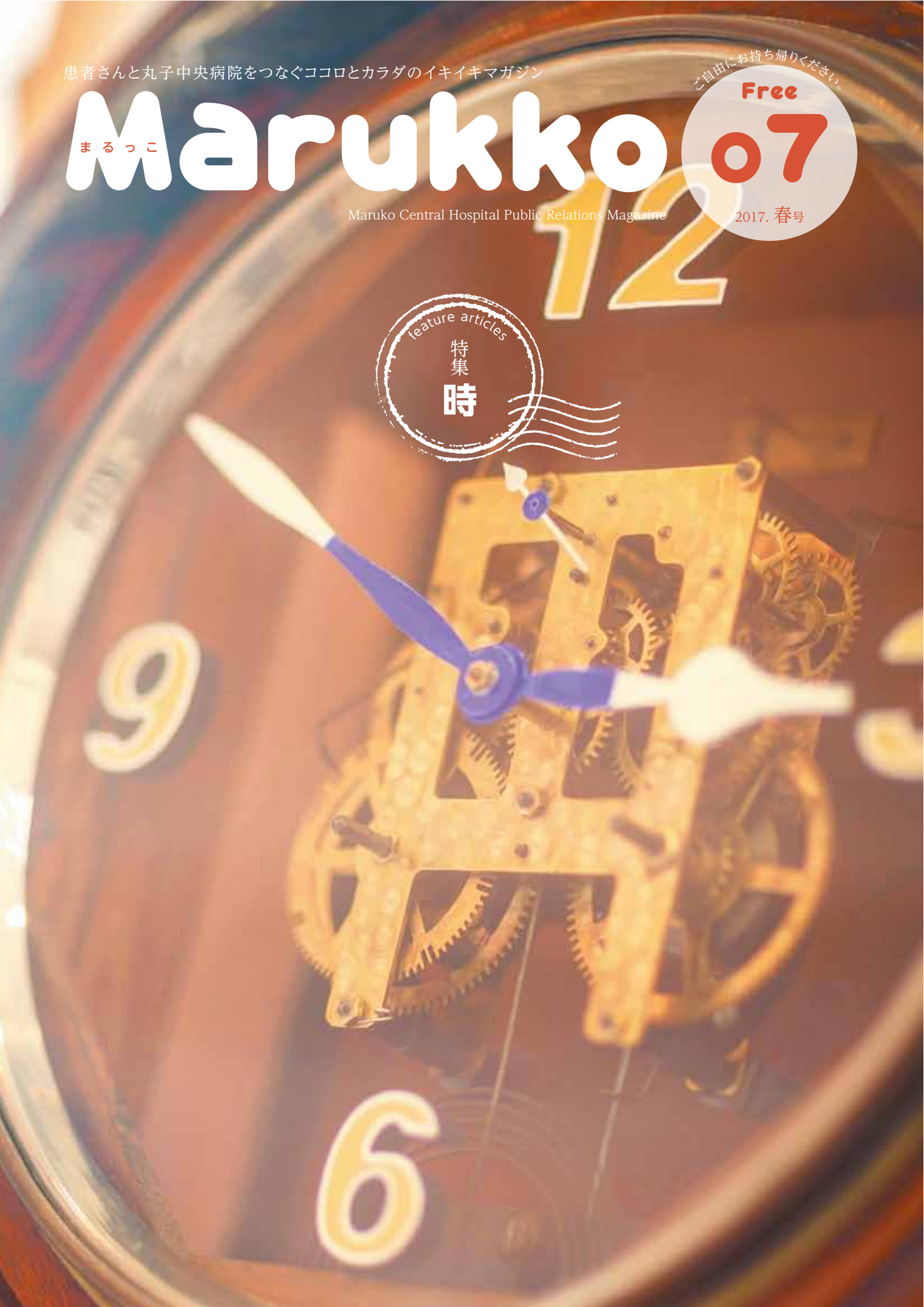
Free

07

2017. 春号

feature articles

特集
時





病院正面玄関ホールで、風格のあるたたずまいで来訪者をやさしくむかえる大きな丸時計。壁がここに来るべき丸時計をずっと待っていたのではないかと思えるほどの不思議な調和を生み出しています。

この時計は、かつて上田市で時計店を営んでいた吉田賢一さんに寄贈していただきました。笑顔がとてもあたたかい「時の匠」、吉田さんにまつわるお話の始まりです。

昔

は、家業を継ぐのが当たり前。当り前の時代だったんです。一人っ子だったし。店には職人がふたりいて、小さいころから時計の修理の様子を見て育ちました。時計が常に身近にあったので、技術を得ることはたやすいことでした。

家業を継ぐのに、「最初は他人の飯を食って来い」という時代でしたから、東京の時計店に修行には出ましたが、やはり

身近で見てきた時計の知識のおかげで、1年で修行を終わらせ上田に戻り、父親と一緒に店をやってきました。

店を営む上では、職人的な部分と経営的な部分が必要です。

ずっと目指してきたのはエンジニアセールスです。まずはどんなものでも修理できる腕、つまり技術的な腕がないと、責任を持って時計を売ることなどできません。

動かないものは、動かしたいんです。部品を他から取ってきたり、ない部品は自分で作ったりして動かすんです。職人として納得のいく仕事をしたいですからね。

持論は「一に実地、二に理論です。実際の経験があれば、理論は自然とついてきます。これがあれば全て対応できる。技術があるから、理論は簡単だったんです。」



直径80センチ、重さ約10kg、およそ100年前、大正初期製造の大きな丸時計。文字盤にはMade By SEIKOSHA, Tokyo, Japanと書かれている。

PROFILE

吉田 賢一 昭和16年、上田市生まれ。元吉田時計店 二代目店主。

新たに歴史が動きはじまる
 ↳ 時を刻み始めた古時計 ↳
 feature articles
 時集時
 古き良き時代から
 思いでを時が繋ぎ
 この先の未来へと
 新たな歴史を刻む。

経

営的な部分では、
 お店以外で売る
 外販について、父親
 と違うテリトリーを見つける
 必要がありました。企業や役所
 に行つて昼休みに時計を売った
 ものです。基本的に負けず
 嫌いで、がんこですからね。
 父親といかに違いを出すか、
 どうやって親父を超えるかを
 常に考えていました。

店では、時計以外にいろいろ
 な物を売りました。ウルグアイ
 の大使館とつながりを持って
 動物の土雛を置いたり、
 フランスのワインケーキを
 扱つて結婚式などの引き出物
 に使つてもらつたり、セーター
 を売つたり。お客さんにはどれ
 も喜んでもらえましたね。
 話題性と人の扱わないもので
 興味を引くという点では、
 先見の明があつたかもしれま
 せん。店内の回り階段は

何度かペンキで色を塗り直し、
 内装や演出へのこだわり、
 自分のひらめきと感性を
 信じ、一步を踏み出す勇気を
 もつてずっとやってきました。
 ただ、がむしゃらだけでなく、
 家族を守らなければという慎
 重さも持ち合わせていたから
 こそやってこられた。ある意味、
 怖いもの知らずだったが、それ
 が食べる糧にもなっていました。
 うまくいったのは、困つた時
 にはいつも助け合つてきた素晴
 らしい仕事仲間がいたから、
 傍で支えてくれた女房がいた
 から、家族の協力があつた
 からです。あとは人と人との
 つながりです。人に喜んで
 もらう、人のためにいかに
 一生懸命になれるか、時計の
 修理二つとも相手の意向を
 ちゃんと聞きながら誠意を
 持つて行う、つまり人との信頼
 関係を築くことなんです。

もし、若い頃に戻れるとし
 たら、音楽をやりたいですね。
 高校時代はトランペットを吹い
 ていたし、父親が映画館の前
 座でギターを弾いていた影響
 もあつてずっとジャズが好きだ
 ったから、ジャズ演奏をしたい。
 山登りは20代前半から、
 仲間と一緒に1年に何度も行
 きましたよ。浅間山や立山連
 峰、白馬連峰：夏山も冬山も
 それぞれの良さがあります。
 二、三人で命綱を結び、危ない
 思いもたくさんしたし、登る
 時は苦しい。けれど、登り切つ
 た時の何とも言えない清々し
 さが、また山に足を向かわせる
 んです。特に冬山は、自然が
 作つた水墨画のようで、二度と
 して同じ景色はない。あれを見
 れば、また山に登りたくなりま
 す。山を登っている時も無心、
 時計の修理をしている時も
 無心、仕事と同じなんです。



今回寄贈した丸時計は、
 落したりぶつかけたりしなけれ
 ば、まだ100年はもちます。
 ただし、ちゃんと休ませる時間
 が必要です。人間がごはんを
 食べるのと同じように、時計も
 メンテナンスをしっかりとやら
 ってください。

時計は、動力がぜんまいの
 機械時計から動力が電池に変
 わり、その中でも電子時計、
 音叉時計、水晶時計と時代の
 変遷とともに精度もかなり進
 化してきました。この丸時計
 は動力が手巻きのぜんまいで
 す。本来、10年が平均寿命の機
 械時計を100年動かしてい



るんです。ぜんまいの時計は動
 かし続けるとぜんまいがすり
 減るので、オーバーホールが必
 要です。100年以上とちゃんと
 動くことは本当にすごいことな
 んです。これからも大勢の人た
 ちに時計を見て喜んでもらえ
 ることが心からの願いです。時
 計職人として最高の幸せです。



仕事仲間にも恵まれ、山登り
 の仲間にも恵まれ、本当にいい人
 たちと巡り会つて、人の味わえ
 ない思いや楽しい人生を送つて
 きました。若い時からの仲間
 はずっと今でも付き合いが
 変わらず、人生の大きな
 財産です。これまでを振り
 返つてみて、本当に悔いのない
 人生ですね。

吉田さんは、病院内の二室で
 時計寄贈に向けてオーバーホ
 ール作業をしている間、大好
 きな登山の愛用ボンベでお湯
 を沸かしては、こだわりのコー
 ヒーをいれて病院スタッフにも
 ふるまってくれました。そんな
 吉田さんの心遣いや優しい
 笑顔、傍で見ていた奥様の
 笑顔にいつも心癒されました。

今日もロビーには、時計だけ
 を見にわざわざ遠方から起し
 くださった方の姿や、外来の待
 ち時間に時計を食い入るように
 見ている方の姿があります。
 時計はわが子と一緒、と語る吉
 田さんの時計にかけられる思いを
 引き継いで、これからも多くの
 皆様にいつも喜んでいただけ
 るよう、この歴史ある大時計
 を大切に守つていかなければと
 思います。

(中村幸子 記)



玄関ホールにはもう1つ、吉田さんから
 寄贈いただいたおよそ100年の歴史を
 持つ柱時計がある。
 時計の動く様子が見えるように吉田さん
 に手を加えていただいた。



特集「時」にちなんだ本のご紹介

『海時計職人ジョン・ハリソン — 船旅を変えたひとりの男の物語』

世界の人々は紀元前の昔から航海をしてきました。その多くの経験の中で、星を観測することにより緯度を知ることはできました。しかし、出発点からの時差、つまり現在の経度を知ることは長い間できなかったのです。このため、航路を見失ったり、海賊に襲われたりすることが頻発しました。経度を知るためには、現地の時間が分かればよいのですが、昔の時計は船の揺れに弱く、正確な時刻を示せなかったのです。

この科学的な大難問を解決するために生涯をささげたのがジョン・ハリソンという人です。彼は非常に優れた時計を作りすぎたため、18世紀当時の科学者たちに、「ありえないこと」「偶然できた時計」と評価されてしまいます。しかし、その中でもひたすら自分の信じる時計を作り続ける姿はまるで求道者のようです。

絵本ではありますが、大人にこそ読んでほしい内容です。昔の時計職人の情熱を感じながら丸子中央病院の大時計を眺めると、きっと見える景色も変わるのではないのでしょうか。



ルイズ・ボーデン 著
エリック・プレグバッド 絵
片岡しのぶ 訳
ページ数/48頁
あすなろ書房



時計展示開催 「オールドクロックの世界」 ～あのオーデマピゲも展示! 時計の進化と仕組み～ 2017年4月22日～28日



当院の1階エントランスホールで多くの皆様をお迎えしている大きな丸時計や柱時計。この2点を寄贈いただいた吉田賢一さんから、他にも年代物の腕時計や昔の珍しい時計や可愛らしい時計など70点ほどを寄贈いただきました。今回、その中から吉田さん選りすぐりの時計20点ほどを吉田さん自らショーケースに陳列レイアウトされ、すてきな「オールドクロックの世界」を作り上げ、多くの皆様に展示という形で楽しんでいただきました。ぜんまいで動く機械時計から始まり、動力が電池に変わってからの電子時計、音叉時計、水晶時計と変化をしていく仕組みや、スイスの高級ブランド「オーデマピゲ」の腕時計を、吉田さんの手により、内部の動きや構造を動画で大きくモニターに映し出した展示は、鑑賞されてる皆さんも大変興味深く、普段なかなかお目にかかれぬ時計に感動されていました。

展示に先立ち4月21日、オープニングセレモニーを開催し、吉田さんのご友人の皆さんや病院関係者が見守る中、展示ケースの除幕式を行い、当院勝山病院長より吉田さんに感謝状と花束を贈らせて頂きました。

- 発行
特定医療法人 丸山会 丸子中央病院
経営企画課 広報係
Marukko(まるっこ)制作委員会
〒386-0405 長野県上田市丸山1771-1
- 編集・進行
北澤 淳一 / 中村 幸子(丸子中央病院)
- アートディレクター
五木田 忠之(MOKUBA.CO.,LTD.)
- デザイン
MOKUBA.CO.,LTD.
- お問い合わせは…
丸子中央病院 経営企画課 広報係
Marukko(まるっこ)制作委員会まで
TEL.0268-42-1111
月曜日から金曜日、10時～17時
(祝日・休日・年末年始を除く)



吉田さん取材中。ふだんは優しい笑顔の吉田さん、時計を語る時の真剣な眼差しがとても印象的です。

編集後記

丸子中央病院では平成29年4月より内科診療体制を「層強化」しております。

循環器内科は、新たに専門医が1名着任して2名体制となりました。心臓超音波検査を充実させ、より地域の皆様に寄り添いながら高度で安心できる医療の提供を目指しています。

また、地域の皆様に役立つ情報発信の場や楽しんで頂けるイベントも企画しています。どうぞお楽しみに。

丸子電鉄から読み解く— 丸子の歴史

かつて丸子町(現・上田市)は製糸産業が盛んで、物流・旅客両面で人の動きの多いところでした。このため、長野県内でも早い時期に鉄道が敷設された場所です。丸子の鉄道の歴史を振り返ることで、丸子の歴史をさかのぼります。

取材協力：西島辰文 榎 桂木 恵様



上田丸子電鉄丸子線の駅名は基本的にその土地の地名が冠されてきました。「上丸子駅」「中丸子駅」といった具合です。しかし、戦後の電鉄路線図には、当然あってよいはずの「下丸子駅」の名は見あたりません。歴史を紐解いてみると、大正7年の丸子鉄道開業時には「下丸子駅」が設置されていませんでした。しかし、昭和10年7月、鐘紡丸子工場竣工に合わせ、「停車場に昇格し駅長を置き駅名を『信濃丸子』と改称」(丸子タイムス昭和10年6月20日)されます。確かに改称には良いタイ



駅があった場所は線路跡が道路に生かされている。左の写真は昭和42年の丸子鐘紡(かつての下丸子)駅。提供:奥村栄邦 様



ミングなのですが、「信濃」丸子という駅名にしたのはなぜなのでしょう。当時の鉄道省は同名の線、駅などの改称を指導していました。たとえば上田駅から真田方面に走っていた線を当初は「東北線」としていましたが、「(東京—青森間の)東北線と間違いを来す虞ありて不都合なれば宜しく改むべし」として鉄道局より同社に警告」(『上田郷友会月報第500号』)があり、北東線と名称変更しています。同名の駅があるの理由で改称の対象になったのであれば、駅名にわざわざ「信濃」とつけたことにも説明が付きません。



下丸子バス停は、かつての駅から北西に100m離れた、国道152号線沿いにある。

大正13年で、丸子鉄道の開業(大正7年)よりも6年遅いのですが、なぜか改称されたのは丸子鉄道の方でした。目蒲線の建設に大いに関わった五島慶太氏は丸子町も属した小県郡の出身であり、東急の事実上の創業者です。のちに上田丸子電鉄が東急傘下になるといいう歴史を鑑みると、感慨深いものがあります。なお、今の丸子の主要な公共交通手段はバスとなりますが、上丸子、中丸子とともに、下丸子バス停がしっかり存在しています。

*丸子鉄道、上田丸子電鉄丸子線、鐘紡丸子工場に関する情報を募集いたします。皆様の情報をお待ちしております。連絡先：丸子中央病院 経営企画課(TEL:0268-42-1136)

田中 克典

かつて『ジャパンアズナンバールン』などと煽てられ、石原さんと盛田さんが、まるで今のトランプを彷彿させる『NOと言える日本人』などと踏ん返り返った途端に、バブルがはじけて現在に至る。そんな中NOと言えなかった一人の男の話をしてみたい。

7年前私の前職(八十二銀行丸支店)着任を契機に『丸子上田会』なる高校の同期会が始まった。4年前の今時分に行ったこの会で、いつものように皆と他愛のない話をしていたところ、誰かに「田中、そろそろ転職?」と尋ねられ「いや55歳の職位定年も2年後だし、この6月で銀行は終わりかな。人事担当に関連会社か仕事が楽そうな取引先への斡旋を頼んである」こんな話を片耳で聞いていたとこそこの理事長さんが、翌日連絡をくれて「だったらうちに来ないか」「えー、女房に話してはみるけど…」週末、今では目覚ましになっているガラケーにメール「今から高崎に行つて奥さんと話したいけど」「今丸子の社宅の大掃除に来ている」しばらく後ザイデンドでコーヒーごちそうになって、ヘルメットをかぶってまだスケルトンの病院を案内してもらった。

女房と二人になって「どうする?」「お父さんのいいようにして」「この女外食でも買物でも全てにおいて絶対自分で決め事しない、30年間この調子、従順? 投げやり? 責任回避? 皆さんどう思います? 結構疲れます。楽な仕事(無いか)に就きたい夢は潰えたが、お世話になることにした。

そういえば昔からそうだった。中学入学、上田四中1年1組11番、担任は体育教師、バスケット部の顧問「お前かー生徒番号1111は、背が高いな(今は年々縮んでいる)、部活はバスケな、いいな」「え…はい」高校入学、担任はまたもや体育教師、陸上班顧問「お前いい身体しているな、陸上班に入つてハンマー投げしろ、いいな」「あ…はい」前職が客商売だったこともあり、基本的にNOと言わない(言えない)人生を送ってきたような気がする。なんと主体性のないことかとも思うが、少し負け惜しみを言うと、人は必ず好きなことはやるし、最終的には自分の価値観でものをみる。あまりNOと言わず、人の価値観の中に「巨身を置いて、自分サイズしていくことにより、結果として実に多くのことを経験することができたよな気がする。



イラスト/森田 宏子

Contents

特集時
新たに歴史が動きはじまる
時を刻み始めた古時計

1~4

連載第1回
丸子電鉄から読み解くー丸子の歴史
消えた下丸子駅の謎

5

トピックス
MarkkotoPICS

6